

# ROSSI 四季報

Research Organization of Social Sciences (立命館大学BKC社系研究機構)

R  
RITSUMEIKAN

2008年12月  
第 43 号

## CONTENTS

〈巻頭言〉 社会科学の方法と視点	長島 修 …………… 1
経済危機の再来とマレーシア	西口 清勝 …………… 2
「ものを調べる」ということ	金丸 裕一 …………… 3
地域に根ざした中小企業の活性化 —模索と新しい動き—	近藤 宏一 …………… 4
無限の話	安富 健児 …………… 5

## 巻頭言

立命館大学 BKC社系研究機構  
機構長 長島 修

### 社会科学の方法と視点

昨年の夏から問題になったサブプライムローン問題は、今年の夏に資源価格の高騰とという変調から、ついに9月リーマンブラザーズの破綻によって金融危機へと発展した。そして、それは、アメリカの危機にとどまらず、世界中に広がってゆき、金融ばかりでなく、实体经济にまで及んだ。世界経済は、リセッションに突入した。100年に一度かどうかはよくわからないが、少なくとも世紀のなかでもそれほど経験したことのない経済の落ち込みであることは、確実である。

社会科学の研究に携わるものにとっては、(不謹慎な発言かもしれないが) これほど研究のそそられる事態はないといってもよいであろう。何故ならば、社会科学は、自然科学とことなって依然として、実験によって、事態を観察することはできないからである。私たちは、この大きな経済の変動の中で、事態を冷静に観察し、分析し、理論化することがもとめられている。そして、そのことができるチャンスでもある。その場合、私たちは、研究者として、誠実に振舞うことを求められているのである。そうした中からこそ新しい理論や分析結果がでてくるのではないであろうか。

社会科学の研究では誤りや欠陥はある。社会科学の研究に、無謬性などありえない。しかし、既存の理論や研究と向かい合い、自らの、思い込みや誤りを冷静に反省し、何が自分の分析に誤りがあったのか、どこに欠陥があったのか、そのことを追求しないかぎり、研究は一步も進まないのではないであろうか。産業革命によって生じた資本主義経済の矛盾を明らかにしたマルクスも、古典派経済学では解くことのできない問題に挑んだケインズも、また、そうした誠実な態度から新しい理論を構築した。

新しい現実に入り込みながら、自らの思考をもう一度点検しなおす。そうした作業が今私たちに求められているのではないか。それは、短期間にできるものではないであろう。また、今動きつつある現実を追求しながら、自らの思考や既存の理論を点検すること、このことこそ今私たちに求められていることではないか。